

506  
267

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





小洒句集

杉の實



506-267



小酒句集

杉

の

實



寄贈本

大正  
11.10.14  
寄贈



題小酒句集

我參天與地  
此意可傳誰  
一曲青山外  
歸雲欲逗遲

大正壬戌夏日

露月山人



序

神戸の小洒子作句をはじめてより二十五年になりぬ  
といふ、願れば久しきものかな、其間ある時は盛ん  
に作りある時は一時のただえを見しも、身健にして  
今に作句の樂みをあらためざる、吟壇の舊友、此道  
に信の深きを知る。こたび年來のものを掻き集めて  
この集を編める、其喜びと萬感とを我も共にするも  
のなり。

杉の實やつもりし年は我も知る

大正壬戌六月

青々



はしがき

此集、折々にまとめ置きし五六帖の稿本により、其帖の趣をと  
ころ／＼改めたるふしもあれど、大方は各帖のまゝにて自選し  
て出す。そは新舊の句をなべて同じき題の下にあつむるよりも、  
かくせる方向の轉化を顧るに興趣あるを思ひてなり。

我れ句作の旅に出でしこと僅かに四回なり、其中にて大原吟行

(明治四十年一月前川素  
泉、岩木、瀧、兩子同行)と城和遊草(同年十月  
同子同行)の二つは途次の句おのづから

疎なれば他の二吟行の如く句鈔より特に分ちて項を立てず。

大正十一年七月下浣

小 酒 生



目次

寒冷紗草堂句鈔	自明治三十一年八月 至同四十二年八月	一……七二
大和路三日	明治三十九年十二月	七三……八〇
夏日山行	明治四十年七月	八一……九四
俳耕日課抄	自明治四十二年十二月 至同四十三年十一月	九五……一〇八
耕餘小興	自明治四十四年十一月 至大正元年十一月	一一九……一四六
俳塵	自大正元年十一月 至同七年十一月	一四七……一九二
俳塵後集	自大正七年七月 至同十一年七月	一九三……二八四
上野村遊稿	大正十年五月	二八五……二九四
同再遊小稿		



# 新年索引

時 候	七	九七	一一九	一二〇	一四九	一九五	一九七
天 文	八	九	九八	一一一	一五〇	一九八	一九九
地 理	一〇	九八	一一一	二〇〇	二〇〇	二〇一	二〇五
動 物	一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一
植 物	一三	一六	九九	一一三	一一四	一一五	一一二
人 事	一七	二〇	一〇〇	一二六	一五三	一五四	二二五
時 候	二二	二二	一〇一	一二七	一五五	二二二	二二三
天 文	二三	二二	一二七	一五五	二二三	二二三	二二三
地 理	二四	二〇	一二七	二二四	二二五	二二六	二二七
動 物	二五	二六	一〇三	二二八	一五六	二二六	二二七

## 夏

## 秋

## 冬

植 物	二七	三三	一〇四	一二九	一三〇	一五七	一六〇	二二八	二三六
人 事	三二	三八	一〇五	一〇六	一三一	一三二	一六一	一六二	二二四
時 候	三九	四一	一〇七	一三三	一六三	一六四	二四一	二四五	
天 文	四一	四四	一〇八	一三四	一六五	一六六	二四六	二四七	
地 理	四五	三五	一六六	二四八					
動 物	四六	四九	一〇八	一三六	一六七	一六八	二四九	二五三	
植 物	五〇	五五	一〇九	一一〇	一三七	一三九	一六九	一七六	二五四
人 事	五六	六〇	一一〇	一四〇	一四二	一七七	一八〇	二六二	二六四
時 候	六一	一一	一四三	一八一	二六五	二六六			
天 文	六二	六三	一一一	一四三	一八二	二六七	二六八		
地 理	六三	一一	一四四	一八三	二六九	二七〇			
動 物	六四	六五	一一三	一四四	一八三	一八四	二七一	二七二	
植 物	六六	六七	一一四	一四四	一八五	一八七	二七三	二七八	
人 事	六八	七二	一一五	一一八	一四五	一四六	一八八	一九二	二七九



寒冷紗草堂句鈔





新年

元日の白鷗を看る栖かな

千榮寺

繪屏風や正月をす草の寺

四方より酒の使ひや花の春

酒家箋にはや墨のつく二日かな

木に水に初日さしけり御垣守

初二日  
初日

元正月  
花の春



門松  
年玉  
仕着  
蘭玉

門松に二日の月や夜歸の客  
途に逢うて年玉くる、翁かな  
梅白し我も陶氏の仕着かな  
蘭玉や朝いの兒の美しくしき

萬歳

懷謙倉翠瀟庵

春駒  
鳥追

萬歳の影さし來らん小町口  
春駒の舊廬に舞へば母も笑む  
鳥追や今戸の舟に昔顔

蓬萊  
齒朶

蓬萊に洒掃全き庵かな  
高臺寺外

楪  
串柿  
白散

齒朶かけて薄茶たてけり東山  
楪や清き二日の硯箱  
串柿を夫婦の中にほごきけり  
白散は居士が瓶子に匂ひけり



遣羽子

遣羽子や、寺中の庵の垣の外

智恩院にて

手鞠

遣羽子の一つ二つや朝がすみ  
閑庭に母とたのしむ手鞠かな

ぶりく

ぶりくや父祖こゝに仕ふ榎原

かるた

若狭街道夜行

ぼっぺん

柴垣に灯のもる宿はかるたかな  
ぼっぺんを吹く孟春の童かな

恵方

巨燧出て恵方の人さまじりけり

初驛

旅人や鞍に梅さす初驛

初卯

里古りて初卯の幟たてにけり

厄神詣

厄神の弓に添え得つ垣の梅

掃初

掃ぞめや大内山の山かつら

書初

書初を堂下の兒に分ちけり

織初

母ありて織初しけり草の庵

乗初

乗初の馬急がすよ乳母が里



初子の日

若菜

七草

土龍打

松納

仁和寺の式紙に書きぬ初子の日

古寺の雪若菜つむ子の聲高し

七草や有明のこる小土器

寒園月下童子玉の如し土龍打

松納書を懐に童來る

新年雜

詩仙堂

臘梅の笑ひ一分や牀の春

# 春

## 時候

春寒

遅日

夏隣

三月盡

鐘の下に春の寒さや智恩院

遅き日や羯鼓きこゆる深山寺

遅き日や山傳ひ來て梅本寺

花落ちて塀を抽く樹や夏隣

亂帙のまゝに戸を出づ三月盡



天文

東風

東風吹くや二つ家鳩顔よする

茅軒

春の風

白散のすたれ帯や東風が吹

清書キの低き机や春の風

春の日

舟二艘ならべて語る春日かな

絲遊

絲遊や傘さしそめし女の子

春の雨

春雨のふる夜はしろしはつせ山

朧月

土くさき宿に寝にけりおぼろ月

春の月

春の月花市はてゝ小酌ス

別れ霜

青氈の埃をうつや別れ霜

無題

馬と寝てぬくもる霜の別れかな



地理

残雪

残雪や中仙道の帘

雪間

ひさしくに雪間通ふや縫物子

雪解

雪どけや山守の子が繪双子屋

春の水

小栗栖の藪を掃き出す雪解かな

春泥

狼の涉らずなりぬ春の水

石竹の居に春水をよびにけり

春泥にそこら柳の黄しべかな

動物

瀬祭魚

瀬祭る魚清絶や梅の花

鶯

鶯に煤はく春の宮居かな

駒鳥

駒鳥なくや真白う花の咲きこぼれ

鶯

鶯啼くや泊り日高き塀の内

雀の子

雀子や斜日に親の影をふむ

嘯

嘯りや流れにまかす筏さし



白魚

鮎・汲

蜩

白魚に深川集のたよりかな

鮎くみや胸まで藤の花たるゝ

鮎汲や南朝の天子峯に在はす

蜩屋の裏は鏡湖の鷗かな

甘棠に物干竿や蜩うる

### 植 物

梅

曉に梅より白き衾かな

谷の柴燃やしてひとり梅見かな

後山の梅は散りたる驛かな

柳

柳看る人に交れば家遠し

桃

桃咲て貧しき家に嫁ぎけり

驢を收め妻に對すや桃の月



李の花 春曉に堪へて眞白の李かな  
 杏の花 杏花咲ておかめの面のうるゝかな  
 櫻 樵唱に伴なふ駕や遅櫻  
 榆の花 牧清め榆咲く頃の祭事かな  
 小粉團 こでまりにとゞまる春や野べの垣  
 山吹 鄙なるや茶に汲む水も棣棠花  
 竹の秋 書の埃かぶりて學ぶ竹の秋

草芳し 俎に草芳ばしき遊びかな  
 春の草 野田村にて所見  
 芹 春草に遊べば母は廬に安し  
 蓬 醉翁を扶けて女子は芹の籠  
 蕨 壬生寺の風呂敷白き蓬かな  
 五加木 捨城や人の來そめて蕨折  
 枸杞 嫂と所思を隔つや五加木垣  
 草鞋ぬぐ僧に枸杞つむ庵かな



薊

紫雲英

菜の花

大根の花

薊に入れば草厚うして薊がな  
乳賣の廬にまきちらすげんげかな  
樹は太く夕日横たふげんげかな  
菜の花や横に舟行き縦に馬

野田村にて

菜の花に陥れば日は真上かな  
一村の冷や一日花大根

### 人事

御忌

吉野餅配

薪能

順の峯入

人麿忌

彼岸

深草の巨燧出でけり御忌詣  
餅配大峯の柚も下り來よ  
薪能樵蘇の婦か夜白し  
峯入や吉水院の春の月  
をだまきの花一鉢や人麿忌  
里人の假橋わたす彼岸かな



藪入

藪入や窈窕として草の宿  
やぶ入の立居にくるゝ二日かな

出代

出代へ残す櫛笥の油かな  
出代や杏花の雨に借足駄  
椿つぐ男居なりや椿寺

二の替

二の替京は柴賣も春の伴

曲水

曲水に花を交へし料理かな

離

春風旅意

二日灸

馬子唄や離屋の妻も昔顔  
柴垣をうるほす雨や二日灸  
日杲々大きく二日やいとかな  
寒食や甕に落つる峯の月

寒食



耕 山 挿 接 苗 上 茶 葉  
燒 木 木 木 り 摘 撰

賓を得て野耕の衣更へにけり  
山焼て微雨の驛を歸りけり  
井邊にさして丈なす柳かな  
尺牘の中に五本の接穂かな  
かたはらにゆるき流れや苗木市  
水にちる春の西日や上り築  
思ひ寝や茶山うるほす宵の雨  
軒古りて桂が下の葉えりかな

# 夏

## 時 候

卯 月

僧訪うてとろゝすらする卯月かな

布引にて

瀧寺の小さき鐘も卯月かな

皁 月

攝州池田町にて

せんだんの川べを過ぎしさ月かな



短夜  
薄暑  
炎天  
日盛  
早  
土用

短夜や水を湛ふる里の池  
みじか夜に一ッの屯葺きにけり  
かけそめし淺黄のれんに薄暑かな  
炎天や玉工深く紗をたる、  
幽砌にとゞまる蝶や日の盛  
柳なき里すさまじき早かな  
書を逃ぐる蠹魚や土用の雲嶮し  
百斛の雨夜に降たる土用かな

### 天文

卯の花下し  
薰風  
雲の峯  
雷  
夕立  
夏の雨  
夏の露

箱根山行くに卯の花くだしかな  
簀賣や薰風鶯を逐うて來る  
銀屏にふる、燕や雲の峯  
雷や目高をかこふ小土器  
夕立や鳥の宿する樹を洗ふ  
夏の雨漁翁が眉を過ぎにけり  
石竹のほそきつばみや夏の露



地理

清水

葛の粉を得てとくくの清水かな

摩耶王藏院席上

青田

縣居の桔梗は早き清水かな  
五老井を四梅廬に行く青田かな

動物

水雞

方丈にくだもの冷ゆる水雞かな

青鷺

暮煙颺る里や青鷺竹に歸す

鴨の子

鴨の子に隣る漁翁が枕かな

蝙蝠

蝙蝠や簀の土の冷ゆる時



蠅  
毛蟲  
蟬  
蝸牛  
水馬

蠅を見ず圭のかゝやく室の内  
毛蟲々々一炬に付して庭の塵  
桐にゐる蟬明らかに見られけり  
汝が眼に微雨小村やかたつむり  
萍のまろきが上や水馬

### 植 物

若竹  
若楓  
玉巻芭蕉  
茂  
夏木立

若竹に一炊煙のかゝりけり  
魚うりの起きそろひけり若楓  
幽人の顔に玉巻く芭蕉かな  
幽人の衣うるほふ茂りかな  
重んずる一樓の書や夏木立  
雲過ぎてこぼるゝ花や夏木立



桐の花

花桐に一藥籠のあろじかな

棟の花

借覽にのぼる書樓や桐の花

椎の花

午蔭にの棟の花を掃きにけり  
濃やかに書にちるものや椎の花

再度山大龍寺

蜜柑の花

鐘つけば椎の花ちるうれしさよ

山梔子の花

僧過ぎて花を嗅ぐめりみかん山

百日紅

山梔子や調度清むる雨のひま  
曝涼の書にこぼるゝや百日紅

牡丹

牡丹見に寺の寮々おぼえけり

百合

百合を栽ゑ一藥泉をひらきけり

石竹

葺合村居

母掃きて石竹園の廬は清し

撫子

撫子に母がもうけし花だんかな

夏菊

夏菊に朝干す衣のしづくかな

鷺草

夏菊のむらくく句へ朝曇

夕顔

鷺草に泉分ちぬ荷ひ茶屋

夕顔

夕がほに水仕しまうて習字かな



芥子	けしの晝港に孤帆平ら也
紅の花	三輪山に唱歌日高し紅の花
當歸の花	古道や當歸盛りに處士が家
綿の花	動かざる四方の雲や綿の花
葛の花	山蔭に養ふ魚や葛の花
胡蘿蔔の花	すて垣や花にんじんの三四本

釣葱	鴨涯の窓相似たりつり葱
櫻桃子	市人に母がわたすや櫻桃子
莓	讀嵯峨日記
荔枝	嵯峨の山仔細に撰む覆盆子 荔枝わる主人が紗燈水の如し



人事

灌佛

布引瀧寺灌佛會

葵祭 楓山に兒を見る日や花御堂  
蓬生に葵祭の料理かな  
競べ馬 風かほる午一ッ時やくらべ馬

夏入

帯木の宿に夏書の机かな  
時有ッて雲廬を奪ふ夏書かな  
御稜 水くるゝほとりに白きみそぎかな  
みそぎ川 蟲賣西へわたりにけり

更衣

更衣世尊に供す牛の乳  
裕 帆は過ぎて遊子の裕つたへけり  
白重 母刀自の閑におはすや白重  
羅 北山やうすもの寒き夜の輿



扇

摩耶蓮華院一泊のとき

山寺の湯殿に白き扇かな

日傘

庵の子は垣内にかざす日傘かな

簞

曉に帷を出てゐけり簞

單席

うすべりのはしに權おくやどりかな

幟

嘲たゝむ都のぞきつ白川女

日覆

大いなる嘲のゆらぎや峯の寺

日覆

かりそめにわたす山市の日覆かな

遣水

やり水に都の中の千草かな

立版子

灯を入れて顔よする子や立版子

夏の宿

傘たゝむくだもの賣や夏の宿

夏構

摩耶王藏院

夏がまへ一爐備へて茶の煙

蚊遣

蚊遣更けぬしづかに寝まる軒の鳥

汗痂

蚊やり火に水一すじの里わかな

汗痂

八重葎汗ぼかなしき預り子

干飯

忘れゐて干飯存す袋かな



藥玉

藥玉や木の間に白き假の御所

菖蒲葺

菖蒲かけん考妣が兜小薙刀  
菖蒲湯や揚屋ほのく六ッをうつ

娼家

この里はあかき枕にあやめかな

棟葺

棟葺き諸生と粽まきにけり

竹植る

竹移す僧や帷子新たにけり

菊挿す

菊を挿し五月の山にのぼりけり

朝草刈

菊さし木雲の峯より水をよぶ  
明くる戸にはやも朝草つみにけり

田植

ひねもすに田唄聞えつ芭蕉庵

鵜飼

早乙女に双ッの鷺の飛びにけり  
鵜を抱て危うき橋をわたりけり

照射

草の雨ふんで鵜川に到りけり  
鹿の飲む清水のほとり火串かな  
照射して古城の凹み守りけり



秋

時  
候

立  
秋

深川へ去來が狀や今朝の秋

初  
秋

初秋や女一人の竈の塵

新  
涼

初秋やはき木刈りし家のさま

新  
涼

新涼に又若干の曝書かな



雨冷

醒酬旅泊

雨冷や灯をあかうして茶一碗

朝寒

朝寒の讀書はじむる柄かな

肌寒

肌寒み木に倚れば木の雫かな

夜寒

草枕思ひくりに夜寒かな

恙ある母に寝ぬ兒の夜寒かな

子規居士七周

朝寒にたてし千草の夜寒かな

秋の暮

秋のくれ楚辭よみかけて灯をとぼす

夜長

あきうどのともしび早し秋の暮

長き夜に窓下の舟をとはれけり

長き夜や手習草子かわくほど

暮秋

炭斗に黄なる葉は何秋惜じき



天文

天の川

相よばふ屯二つや天の川

星月夜

城を落ちて君舟に在り星月夜

稻妻

稻妻やよしの、宿の罨の中

秋風

竹簀戸に稻妻うすし宵の客

野分

秋風や障子の中に泊り客

萩

萩芒ほうく里の野分かな

野分

野分ふく矢矧の翁恙なきや

露

大原に借家たちけり露の中

高倉宮

夕露やわきて案内の小百姓

奈良坂にて

朝露や菜籠ひろぐる坂の上

秋の雲

丈山が嘯く窓や秋の雲

露時雨

花賣りにお庭通るや露しぐれ



秋の雨

醍醐寺

雲よんで松皆ゆゝし秋の雨

月

玉すりの翁訪はれつ月今宵

後の月

粟稗の影疎をかや月の雨  
しろくくと助炭かけたり後の月

地理

秋の水

秋の水花火に遠く泊しけり

黄色なる更紗そむるや秋の水



動物

渡り鳥

菊川や障子にひゃくわたり鳥  
里人は茱萸に齒染めつ渡り鳥

三室戸寺にて

茶は煮えて一むら雨やわたり鳥

頬白

ほゝじろの眉ゑがきてし胡粉かな

十二紅

十二紅ヒレシジャク婦が山莊に賓ある日

鴨

南天に袋かぶせつ鴨の聲

鷓鴣

菊あれてまれく下りる鷓鴣かな

雁

初雁や青々とふく船の苦

淀一夜雁行急になりけり

雁の行斜に長し古戰場



鹿

奈良旅興

鹿をきゝて古本あさるや旅姿

鱧

鱧魚の前父が朱をうつ清書かな

蟲

せんだんの下に灯を置く蟲屋かな  
かりそめに陣屋はなれつ蟲撰

鈴蟲

すゝ蟲に嵯峨野の千草入れにけり

蟋蟀

愁人に侍座の垂髻やきりゝす

竈馬

客去

竈馬も反古も掃出す残夜かな

蜻蛉

般若寺荒涼

かまさりの戦ふならし庭の原

蓑蟲

蓑蟲よ一絲をつなぐ蘭の花

秋の蝶

白晝に折るゝ芭蕉や秋の蝶



植 物

桔 梗

空山の廬いほりにさしぬ白桔梗

野 菊

鹿追に夕べふまれて野菊かな

秋海棠

薄葉に墨のにじみや秋海棠

亡き母の日記を取出て

蘭の花

水莖のあとふた巻や斷腸花

蘭の花

婦は室に白きを裁つや蘭の花

白粉の花

郡山の旅亭をたつさき

蓼の花

おしろいの花つむ宿の別れかな

萩

易水に斜日するどし蓼の花

萩

篝燃えて夜の趣や蘆萩洲

芭 蕉

晝掃て風なき時の芭蕉かな

方尺の硯持出す芭蕉かな

縦横に雨來る庭の芭蕉かな

驢に乗て童高き芭蕉かな



末枯  
桐一葉

うら枯や八瀬の里子の薄化粧  
山蟻の歩みするどし桐一葉

木槿

北邨や捨て、焼かる、花木槿

紅葉

紅葉見や蒼苔をふむ玉の沓

返照や紅葉が下の漆桶

は、そ山奈良あきうごの絹羽折

榲木の紅葉ゆゝし薪山

棗

曲巷に古き棗や生薬屋

柿

孝經を講じて柿を分ちけり

熟柿

僧ひとりうみ柿すゝる夜舟かな

柑子

明石屋樓居にて

庭の寂び一つの柑子残しある

金柑

里の子の金柑にぎる祭かな

椎の實

椎の實のこぼるゝ宿や母と住む

銀杏子

高坏にぎんなんしろし夜手習



木蓮の實

北花山華山寺にて

木蓮の實をいたゞくや庭の奥

松毬

松毬をくべてひとりや小夜の粥

稻

北花山元慶寺を華山寺に

まぬるさき

落穂

のどけしや稻ぼたわみて寺二つ  
老に侍して門を出づれば落穂かな

冬瓜

青燈の下に置きたる冬瓜かな

菌

深草

草の實

かはらけに裏白敷てきのこかな  
草の實のわづかなる日にそまりけり

鬼灯

鬼灯をならす趣相似たり

綿

綿取のもどればくれつ家の内



人事

門茶

僧と我芙蓉を隔つ門茶かな

草市

草市に法師が母の下山かな

灯笼

しら露や孤棲の灯笼かけしより

送火

我窓に孤村の灯笼更けにけり

地藏盆

送火の果つれば草の匂かな

阿母が附ス一囊錢や地藏盆

夏解

眼前に芭蕉全き夏解かな

願の絲

古郷に願の絲や白拍子

梶の葉

梶の葉にはかなき歌や陣の内

後の出代

出代や浪華はづれの藍の花

花火

花火ちらす夜里遠けれ國分山



秋の宿

杉毬の青きこぼれや秋の宿

木幡茶店

團扇置

澁紙にすわる晝餉や秋の宿

絲瓜の水

夕べ誰秋の梢に團扇おく

新酒

月傾きて絲瓜の水は澄みにけり  
北狄に危うき城や新酒時

添水

添水かけて故人の廬イホリ守りけり

落し水

落し水我は補ふ籬かな

鳩吹

鳩吹や入日にむかふ櫟原

崩れ築

芒こす風の白さよ崩れ築

竹伐

竹伐て里爽かや一乗寺

秋雑

秋の灯を挑げて學ぶ翁かな

元政上人墓にて

遊子來てすゞろに竹をにぎりけり



冬

時  
候

師	冬	凍	冬	小
走	至		さ	春
			れ	
筆	か	椿	冬	小
結	る	燃	さ	春
が	た	え	れ	日
障	は	て	や	や
子	る	鳥	水	茶
し	庵	は	壺	俗
づ	に	凍	伏	か
け	冬	た	せ	わ
き	至	り	し	く
師	の	家	権	枯
走	日	の	が	木
か	影	北	下	原
な	か			
	な			



天文

時雨

灯ともしてあたゝまりまつ時雨かな

凧

柚をもぎし祭の後のしぐれかな

こがらしやよしのゝ櫃をあぶる夜に

霜

凧のふく夜を峯の法話かな

霜

詩仙堂晩歸

むら竹に宿する鳥や霜を帯

雪

大原雪景

山鳥の尾をふりかくす深雪かな

吹雪

けだものゝ眼をとづる吹雪かな

地理

冬田

鶴鴿のつたひふるせる冬田かな



動物

寒雀

枯枝に疎らにゐけり寒雀

木兔

木兔は疎影横斜の中にある

鴛鴦

をし馴れて水の栖にたのみあり  
をし見ゆるほどに柴つむ蔀かな

鯨

鯨曳く噂聞えつ草の庵

河豚

河豚洗ふ亂峯を前に水白し

鮎

菊は黄に疎に亭北はいさゝ舟

海鼠

海鼠くふ妹にさしけり金屈危



植 物

寒 梅

寒梅や人の知らざる明り窓

寒 椿

寒園に玉より白き椿かな

八ッ手の花

黄蘗に花あるは唯八ッ手かな

冬 木

落 葉

孤ッ屋の冬木に二羽の雀かな

浙瀝と城の落葉や市の上

藤の森神社

藤落葉奇麗に掃きし社かな

枯 芒

那古の海やうなじの上の枯芒



人事

神送

三輪の里大根白し神送

十夜

北山をうしろにすわる十夜かな

蕪村忌

貧交の漁者よ樵者よ春星忌

クリスマス

クリスマス燦として我詩集出づ

深山柴

雲下りて籬落にぬる、深山柴

つゝじ柴

鳥のふむ徑は荒れてつゝじ柴

夜は燃えて廬をあかるうすつゝじ柴

妻木

大原寂光院

み佛のいひ焚きなれしつま木かな

菊刈

菊刈や玉の緒つなぐ蟲の絲

菊柴

大よそに二把にくゝりし菊の柴



爐 開

助 炭

槽

冬 籠

冬 構

藪 卷

爐 びらきや母につかふる小百姓

しづくと朝日さしこす助炭かな

曉や獸はなる、槽の宿

清閑寺

むら竹の中に障子や冬籠

蘭に菊相へだてけり冬構

湖の鳥の通ひや冬がまへ

山端平八茶屋

藪卷に添うて來にけり帘

亥の子

鷹狩

麥時

寒念佛

粥施行

大原雜喉寝

亥の子つく兒や黄葉の一佳境

鳥叫や枯木をしぼる山嵐

凧の尾の下に麥まく小村かな

寐鳥より上行く坂や寒念佛

岡寺に弓張たてぬ粥施行

鶯のよみ歌は誰がさこねかな



餅 搗

きぬふゝや餅の粉しろき小板敷

煤 拂

餅の香や枕屏風に六歌仙

衣 配

風はりの翁もすなり煤拂

喰積つくる

衣配せみの小川をわたりけり

炮烙賣

喰積のそろへば小夜の化粧かな

書出し

炮烙にしろがねこぼす聖かな

岡 見

書出しや言問の茶屋のみやこ鳥

留守の書に書肆の書出し朶りけり

婦が窓の灯あかるき岡見かな

大和路三日



# 大和路三日

明治三十九年十二月一日、大和吉野口驛下車  
吉田王郎、長尾子、蓋兩子同行

六田途上

寒江に傾く家や竹百竿

吉野山中

初冬やはなれくの飯煙  
落木の根に寒菊や栽すつる

藏王堂



後ろより鐘をつき出す寒さかな

吉野町一泊

桶風呂や竹の林に霜の聲  
みよしの、火桶にかざす繪卷かな  
思ひ寐やむかしの山の置巨燧  
金屏風寒きよしの、寐覺かな

晨起

四方山にさゝ啼きゝて朝餉かな

吉水院

さゝ啼やしばらく遊ぶ日三竿

吉野町所見

春着縫ふよしの小町や葛菓子屋  
初冬や狭菴なべて杉の毬

如意輪寺茶所

山鳥の尾の上の庵や紙衾

吉野下山



さくら木に糸よりほそき時雨かな  
六田より山道を壺坂に出づ

壺坂川

川音のしぐれになりぬ寺の下

高取町一泊

糸ひきの妻によばるゝしぐれかな

河芙蓉亭

うすらく生薬匂へ冬座敷

同亭席上

水古き入江の舟に妻木かな

同子が不背山樓に登りて

寒月や山脈走る閣の上

橘寺

寺林中に柑子や冬構

岡寺

冬されや瓦寄進に鳥のくる



さゝ啼やお守うけて日南ぼこ  
飛鳥の里にて

水鳥や莖菜の使女の童  
飛鳥寺

菊に柴かつく冬の日南かな  
豊浦寺

里蔭にいてふこぼれて冬ぐもり  
久米寺

寺なれて子守のそろふ小春かな  
鶯の子よ子守子よ大和顔



夏  
日  
山  
行



# 夏日山行

明治四十年七月六日早旦、美濃中津川驛下車  
中津町より落合を経て信濃に入る、從弟同行

馬籠峠（美濃信濃國境）

羯鼓鳥糞をこぼすや石磊々  
老鶯の嘴ひたす清水かな

木曾馬籠驛

繭曝す戸に山影のいたりけり

妻籠驛茶店午憩



帷をあげて夏川見する主かな  
三留野驛一泊

日落る亂峯の上の雲の峯  
三留野驛早發

曉の雲蹴て行くや單衣  
野尻驛

はたご屋のたま〜清し若楓  
須原驛

夏がまへ樹を栽ゑ家鴨うかべたり  
上松驛

駒ヶ嶽に雲湧き宿は蟬時雨  
高峯より雲吹落よ夏の笠

駒ヶ嶽仰望

群巒を壓してよぶや五月雲  
寢覺の里

山之水に蕎麥うつ店やほとゝぎす



同 臨川寺

亂 鶯 の 徑 窮 り ぬ 郭 公

同 寢覺の床

頃 刻 に し て 雲 衣 に 移 り 郭 公

福島驛途上

風 一 陣 早 苗 を 過 ぐ る 雲 の 脚

福島驛一泊

夏 釜 山 水 黒 く 夜 の 雨

木曾山中所見

馬 市 の も どり は 涼 し 檜 笠

傘 や 小<sup>ホタル</sup>山<sup>ツク</sup>菜<sup>コ</sup> に 雨 こ ぼ す

宮の越驛

麻 の れ ん 翠 巒 の 影 の 映 り くる

吉田橋

老 鶯 の 微 雨 に た へ ず や 白 雲 境

藪原驛お六櫛



さみだれや女夫古びし坂の下  
鳥居峠

病葉の縦横にとぶ風雨かな  
眞清水にひたと口やる峠かな

中仙道奈良井驛

大いなる病葉落ぬ驛口

贊川驛途上

雲さびし山鳥の後に羯鼓鳥

櫻澤驛

數峯に分るゝ雲や羯鼓鳥

本山驛

覆盆の雨亂鶯を制しけり

本山より鹽尻まで馬車

洗馬驛

蒼翠にうるほふ馬の瞳かな

鹽尻驛途上



麥秋や涼しきものは馭者の笛

鹽尻より上諏訪まで汽車

上諏訪町一泊

五月雨に温泉の湧く宿ぞたのもしき

上諏訪より汽車にて甲斐に入り

甲府市に到る

甲府より猷澤まで馬車

釜無川畔

よしきりや馬に加ふる鞭の下

南湖一軒茶屋

水茶屋に覆か知らず茂りかな

青柳村

里垣にすれくうれし夏帽子

猷澤にて

玉簪花や旅に書覗く店の端

富士川沿岸南下



西島途上

夏萩やいといとけなききりくす

西島茶店小憩

長橋を横にすかすや夏木立

切石途上

裸子の三人すゝし花葵

切石にて

葵たまく雪より白き誰が家

つばくらめひるがへり幾花柘榴

八日市場にて

門々は金<sup>ピヤウヤナギ</sup>絲桃のさかりかな

飯富茶店小憩

ほうじろの眉に風あり麻のれん

早川橋

つり橋や五月の水のおそろしき

下山にて



青柿の小さき驛に落ちにけり  
波木井にて

竹すゝし身延の裙のかゝり舟  
南部一泊

朝涼にかじか鈴ふる寐ざめかな  
萬澤にて

里垣の果や鶯音を入るゝ  
駿河に入る

内房にて

そぼふるや早苗色こき傘の下  
東海道岩淵にて

魚くさき人に買はるゝ李かな  
興津一泊

梅雨晴やはや紅ふくむ秋海棠  
袖師にて

松さまぐゝまた蟹の子のさみだるゝ



俳  
耕  
日  
課  
抄

静岡の入口にて  
女にてゆかし魚うり李うり  
里の子の眼にまだ青し棚の梨



新年

新年雜	正月	押鮎	手毬	俎初	鶯替
丈草集の薄きもわびし庵の春	正月も賤が柴負ふ山路かな	押鮎に寒ぶけき酒や樵ども	山賤のさびしさを手毬つきにけり	賓人に俎ぞめのみかんな	鶯替の後大雪や離れ里



暮  
春

# 春

春くる、門のひろさや百姓家  
春くる、庭にもものなき畚かな

叔母の假居にて

門口に桃の實生えや暮の春



東風

東風ふきて貝の口あく洲濱かな

春の日

春の日に逢ふや吉野の杉の毳

春の山

春の山たどんまろめて眺めけり

囀

囀りや石つみ上げて塔の形

梅

うすべりに瓦硯や梅の花

山坂や柴の車に梅の花

柳

古しへの津守が植ゑし柳かな

山まろく柳けぶりてのぼり舟

李の花

古岡に雪なす君が李かな

櫻

花のころ傘はり住まふ坂の下

尼達のこぞりて白し花の蔭

藤

山のふじことくと水車ふみくらし



御忌

いたゞける柴をおろすや御忌の場  
御忌まちて母を迎ふる遊子かな

丈草忌

湖の南を懐へ丈草忌

藪入

やぶ入の心いそぎや雲のきれ

二の替

藪入は皆放翁を見舞ひけり

籬

島ぬし下部つかはせ二の替

茶摘

籬に灯をおかで杉垣濃き夕

木幡道茶つみは藪のあひく  
に

# 夏

卯月

こでまりの蔭ひいやりと卯月かな

暑さ

桃の實を椀にもりたる暑さかな

土用

松蔭に土用をかたる里居かな

翌日秋

翌日は秋七時をくる、蟬の聲



卯の花下し

雲の峯

隠れ家にどめて卯の花くだしかな  
雲の峯山上水の湛へかな  
なつかしや旅の簷端の雲の峯

夏の山

夏の山へにひるがへるつばめかな  
夏の山茶屋の泉の鯉ぞとぶ

時鳥

ほととぎす塀のそばだつ山ヤドリ舎

青鷺

青鷺や田水たゝへて里ひろし

水鳥の巢

水鳥の巢の小さくよ余吾の湖

鮎

山青し店は竹籠に鮎入るゝ

蠅

山蠅や葛の葉くらふ馬の鼻

蟬

初蟬やせみの小川の川上に



夏木立

柚の花

向日葵

芥子

枇杷

筍

休らうて幹をさするや夏木立

客ひけて花柚の匂ふ夜の雨

祖母の七周忌に會うて

金色の向日葵の座や西の空

灘走る舟つれなさよ門の芥子

布引某氏居閑談

午長し支那の大批杷盡くるまで

筍にするごき雨のふる夜かな

夏入

富士詣

遣水

行水

折々は樵の便る一夏かな

朝涼の内に夏書をすましけり

海道は稲葉そよぎて富士詣

遣り水に母のくゆらすけむりそふ

客人に行水の湯の澄みにけり



朝草刈  
田植  
鶴飼  
照射

草刈や大利根の波白むほど  
田子見るや夕日に日傘かたぶけて  
籠を出る鶴のちらばうて入日影  
夜の瀧まのあたりなる照射かな

# 秋

初秋  
文月  
菊月  
肌寒

初秋や久しう居りし僧の去ぬ  
ふた色のたにざくもらふ文月かな  
菊月や手をおきそむる桐火桶  
肌寒や大きうなりし橋の穴



稻妻

稻妻や犬も率て守る峯境

露

夕露や布裁つあとの掃そうじ

霧

朝霧に行くや明石の松の中

露時雨

水すまし又あわつるよ露しぐれ

秋小鳥

歌ぶくろ秋小鳥類一くゝり

鳴

鳴の暮とひやうしもなき狼煙かな

鯛

鯛になるゝ山家の夕餉かな

秋海棠

ひやくと秋海棠の御階かな

草紅葉

濱芝に小貝のちりて草紅葉

芭蕉

唐人の芭蕉をくゝる酒屋かな

芭蕉葉の一日平や布を裁つ

栗

母在ませし頃

初栗をまちかまへての料理かな

椿の實

閑かさをうすう染まるや椿の實

杉毬

よしの人の手や杉くさき杉の毬



草の實 ついと入る鳥や實になる草の原  
 蕎麥の花 染めあへぬ小草生ひ添ふ蕎麥の莖  
 綿 綿取に宮居の鳩の翔けるかな  
 煙草 日あか／＼煙草の蟲のはらへども  
 魂祭 蠅逐うてかしづきにけり魂祭  
 七夕 や箒しづけき垣の口  
 何くれと星に物貸す今宵かな  
 秋の宿 のうれんをはづして寒し秋の宿

冬

初冬 初冬や袖守の鳩の双つ白  
 初冬 や小瀉ほとりの煙出し  
 凍 杉むらのひしと匂ふや山の凍  
 時雨 生木つむ馬は真向きや北時雨  
 風 ことがらしや櫻ほそ木の夕山路  
 風 ぞふく篋の清閑寺



冬の山

僧形を見かけてよるや冬の山

懷茸合舊爐

石竹の花母と守りき麓冬

冬の川

高土手の雄松たくまし冬の川

冬溪

冬溪フユのタニ小魚とらるゝ哀れなり

冬の海

象潟の假居たゝみぬ冬の海

鶯の子

鶯の子よ丈山の棲む所

寒禽

寒禽にかゝる哀れや飯煙

寒禽の一羽日くるゝ柳かな

鶯鶯

賓人のをしに養ふ病かな



早梅

早梅の峯に下駄はく病後かな

冬椿

冬つばき風に戦ふ杉の下

冬木

園守が帽子深さや冬つばき

奥平野村豪駝某氏にて即事

木の葉

三十の冬木の鉢や門の内

落葉

木の葉ふり小鳥の嘴尾いそがしき

草枯

春くや落葉のどけき塀の内

枯芭蕉

草枯やうかりと立ちし潭の上

枯芭蕉

枯れにける芭蕉ねごろにつゝみけり

達磨忌

達磨忌や畑物のぼす峯寒し

炭

炭斗をかたぶけて干す夕日かな

柴

むらさめや柴の穂ぬらす庵の口

つゝし柴

山行

小石つみて一壺の米蒸さんつゝし柴

槽

槽はもえて幽かにむせぶ泉かな



蒲團

貸舟にふとんも添ふやみやこ鳥

金

丈草よ衾負ふらん山嵐

寒見舞

寒見舞ふ人よろこばし明り窓

莖漬

莖おすや柴山見ゆる川向ひ

顔見世

顔見世や巨椋の鳥の夜明方

網代

網代守ながるゝものゝかつさびし

蕎麥刈

蕎麥刈りて愛想なげなり一休寺

節分

鬼追ふ夜矢矧の翁訪はれける

餅搗

餅搗や山茶花淡き宿の口

衣配

北山わたりよき衣くばる深雪かな

年木

道一つ年木の山をつたひけり

裏白賣

山風に裏白賣のくだりけり

書出し

書出しに石をおもしや草の宿

歳暮雜

なみ女遺稿を得て

もみぢ一葉たまく年の湊かな



耕  
餘  
小  
興



春

春 曉  
日 永  
遲 日  
春 之 暮

春 曉 の 白 き に 逢 ふ や 僧 樵  
遠 き 母 見 ん と て 永 き 日 辿 り 夜 は 暮 ひ  
遅 き 日 に 樵 の む す ぶ 清 水 か な  
閑 窓 に 灯 を 置 き か へ る 春 の 暮



春深し

蒙塵の春深き夜の女装かな

暮春

塵ひぢのつもりし塚や暮の春

春は謝す花の甕の水臭し

此女此頃春惜みしが今日は亡き

春盡

大いなる草野の春もつきにけり

春雨

春雨や酒豪の墓に水をうつ

従妹の葬に

春雨に風のそひけり野邊送り

春の水

曙に高きより汲むや春の水



鸞

雀の子

鳥の巢

夜に入りて思婦と戻りき籠の鸞

雀黄に小軒の花淡きかな

甘棠に鳥舊棲を修めけり

蜺

村泥の乾くや蜺水乏し

蜂

庭濕を含むや斜日蜂にぶし

春悠悠々蜂は假寐の人をさゝす

梅

風勁く古丘の傾斜梅の花

ものゝふの古き瘡痕や梅の花

古城訪ひ車きしらす野梅かな

母老て維摩誦しけり梅の花

柳

馬つなぐ門懇意なる柳かな

李の花

爛酔や李花地に敷きて晝白し

辛夷

山驛の庭下駄大に辛夷ちる

躑躅

晚霽に諸家詩を終へつつ、山



若草

草芳し

春草

菘斗菜

母と坐す草嫩かき門野かな  
草を嗅ぎ樂しむ春や江の南  
瓢こけてまた春草を肥やしぬる

從妹の天折せるを悼みて

をだまきよ其かよわきがしぼむこそ

丈草忌

挿木

接木

雛

春の泊

丈草の昨逝く文や嵯峨の庵

兒孫我を繞りて立つや柳挿す

三翁の頭あつむる接木かな

雛店をあけて受くるや日三竿

家内むつましと見しうれしさや春泊り



夏

薄暑

寓寺僧と日淺く枇杷青玉に薄暑かな

秋近し

桔梗折り梨守訪ひき秋ちかし

露涼し

乳の甕いたゞくや露すゞしさに

清水

峯づたひ落ちつゝ敵も幾清水



時鳥

生布裁つ婦が慧しきや時鳥  
ほとゝぎす山隠れ家の晝の風呂  
ほとゝぎす柩納まりて暮柳あり

蜻蛉生る

蜻蛉出づ母は小兒の帽買はん  
巨人ふむ一ッ時くらし蟻の國  
蟬なくや旅しのゝめの軒ば山

蟻

蟬

新樹

大著稿脱しイホリ廬の榎新装す

若葉

庭若葉紅芍薬をもて通る

玉卷芭蕉

芭蕉玉卷ける哉新月新臥牀

茂

茂山に近ごろ白き僧舎かな

杜鵑花

さつき山流泉見ゆる石の竅

夏草

夏草に水を見しより山路かな



芍藥

芍藥や午興の酒の脈に浸む  
芍藥寺訪ふ伯樂が薄羽折

悼平原國手

芍藥玉碎幾尊酒堂に滿つらんを

撫子

蟲にちる撫子きよし寫しもの

芥子

湖に傍ふ旅の一日や芥子の花

楊梅

やまもゝや山舎午談に一掴み

富士詣

こゝらまで鶯なくや富士詣

夏羽折

蜻蛉はじめて眼を過ぎ萱野夏羽折

帷子

帷子に朝日のすける山路かな

帷子の折目正しく病後也

夏の宿

水さしに菊の一重や夏の宿

夏の泊

浴みとる石の清らや夏泊り

納涼

魚寂たり水榭午涼の枕もと

溪間ゆき巖にふるゝ涼みかな



粽

麥湯

生簀

水莊より坡を見るに微雨に粽くる  
朝餉中麥湯ふきこぼれ香はしき  
汐水の入りかはりては生簀かな  
高浪の石にとゞまる生簀かな

夏雜

葦合村居懷舊

夏蔭やかよわき母にかしづきて

# 秋

新秋

冷やか

朝寒

夜寒

移居の夜の燈に新秋の二人かな  
母儀を亡うて冷やかにおはす聖かな  
朝寒や見上げの坂に水車まふ  
やしる裏筋藤の葉さわぐ夜寒かな



稻妻

秋風

旅泊寐ねすありや柵海に沿うて大稻妻す  
秋風や舊居のとり木誰か植う  
庭にも箕にも秋風禾の塵

野分

野分吹きそめて松蔭鶏の伏籠かな

秋の日

病中曝書秋の日にがく黄なる花

露時雨

露しぐれ竹買ひの来て偶坐かな

三日月

三日月や竹撓ませし崖の畏

秋の山

高談に暑移りぬ秋の山

秋の山静けさに小石うちあはせ

秋の峯の晴亭上の鳩一聯

花野

障子はる學舎女子見ゆ花野かな

秋の水

薬湯の澄めるより澄めり秋の水

水秋や岩とびわたる歸寺の僧



渡り鳥

旅笠に蔭なき坂やわたり鳥  
小鳥來る低き庭木や市の庵

鯊

一層樓に書曝すや鯊の舟多し

澁鮎

暮雨しぼる身にさび鮎の賣れしぶり

松蟲

懷丈草

松むしや粟津の僧のうすづく夜

寗馬

暮雨に啼くはいとゞか豆木干し入るゝ

秋海棠

栢は古家を語りそこらは秋海棠  
葉は蒼苔を掩うてゆたか秋海棠  
火を打てば露ふる庭や秋海棠  
秋海棠くち寺の瓦落ちたまり  
秋海棠に日すくとはや暮るゝなり

蘭の花

蘭採りて閭に入るに薄暮鵝は追はれ

菊

山に入る日の一、映えや庭の菊



木の實

秋葉<sup>コノハ</sup>えらびたくはふ山居かな

柿

馬車下りて故郷なりけり柿の照

栗

柴栗を干さぬ家なし水車まふ

椎の實

栗飯に日の澄みきりし障子かな  
袂うれしく兒椎坂を下りかな

松 毬

松子落つ夜を韋蘇州の病かな

蘭の實

孤棲衣を思へば蘭は實を成しぬ

帝木の實

再度山にて

煙 草

はゝき木の實を扱く山のさびしけれ  
たばこ干す土堀日わるゝ舊里かな



灯笼

灯笼の夜嵐に燃ゆか山の墓遠み

七夕

星合や泉洗うて噴かしむる

花火

花火ちる夜廬は庭清水甕にあふれ

秋の更衣

墨染の下ひやゝかに更衣

九月

九月 破屋伊吹の月すごし

行水名残

山寺の木の間浴みもなごりかな

秋の宿

軒に干すたつきのものや秋の宿

園

杉垣に實のつくころの園かな

收穫

高き坡より收穫見ゆる垣の内

椎柴

椎柴や一廬つたへし國分山

椎柴つみ葛ほりいそげ時雨はや

秋雑

狭むしろたゝく其家くの秋の塵



冬

初冬  
寒さ

初冬の垣内に青きすゝきかな  
江北の樹皆一なる寒さかな  
兒寒う去にて灯ともる村舎かな

時雨  
雪

秋海棠消えがてにたもて初しぐれ  
雪の窓布を裁ち暮に及びけり



冬の山  
枯野  
樹は太く人は巨に冬の山  
よその里に夕日のあたる枯野かな

寒禽  
寒禽や苦茗を啜る溪の奥

冬の梅  
懷露月翁

木の葉  
寒菊  
山傳ひ二三病家の冬の梅  
日を支ふ貧しき水に木の葉かな  
寒菊や筈をとゞむる孝子が慮

神樂  
杉間夜神樂山里樵つどふなる

邊陲や神樂日くる、砂埃

火鉢  
驛古りこの大火鉢つやくし

冬籠  
閑人のこれをくりぬく火桶かな  
冬ごもり夜毎魔神の馬馳する

足袋  
征車還る書の大行李冬籠  
足袋うりの訪なひくる、小扉かな



亥の子

山住の寒う間をとる亥の子かな

餅搗

餅箱の平めにゆかしとゝのへし

年の急ぎ

年の急ぎ廬の古階子危うけれ

年の柴

大まかに山人刈り急げ年の柴

大年

大年の山橋を掃くや水車翁

俳

塵







熨斗

喰積

御帳綴

柴山口あけ

六日

歌御會始

草堂

かくむすぶ幾世正しき熨斗二尺  
喰積す瓶子借おく寺住居

奉書買はん紙屋折ふし御帳綴

柴山口あけ狐<sup>キツ</sup>狸<sup>ヌ</sup>に白き飯<sup>イ</sup>にぎる

女がちに夕日おたやかな六日の野

御製萬里に傳ふらん鳳凰の春

# 春

冴返る

春の朝

暖

長閑

麗

小紺買とる桶淺かりし冴かへる

訪花戸某

春の朝いきくさ缺ならしくれ

桃の木にかけし梯子やあたゝかに

廣前清むひそりのどけき舍人かな

小亭

門坪うらゝ地を匍ふ蟲の影もなく



初 虹

初 虹 や 麥 生 に 小 橋 かゝる 里

春 の 日

下 枝 に 雀 の ならぶ 春 日 かな

春 の 雨

春 の 日 や 母 老 いて たゞ 垣 の 内

小 亭

一、日 ゆ どり に 土 を に ぎ ら ず 春 の 雨

春 の 月

晚 歸 途 上 二 句

高 石 垣 の 原 の 細 木 に 春 の 月

春 の 夕 月 かへ 馬 なら べ 走 ら せ て

松 蓬 鳥

春 寂 々 帝 陵 の 松 に 松 む し り

春 の 蚊

春 の 蚊 を 摺 餌 の 燭 に 見 し 夜 かな

柳

柳 の 芽 朝 風 呂 に 水 汲 み 入 れ て

山 菜 萁

路 す が ら 兵 叛 き 去 る 柳 かな

椿

山 菜 萁 に さ び し き 僧 の 笑 ま ひ かな

沈 丁 花

日 も す が ら 木 を 挽 く 庭 の つ ば き かな  
藥 煮 つ め て 夜 坐 も 頭 重 く 沈 丁 花



尊生ふ

土筆

渡菘草

虎杖

海苔

豌豆の花

春の草花

山をめぐらして静かなる池や尊生ふ  
土筆つむひさぐに町をはづれたり

妻に對して

醫家の推す其はうれんそ日に浸たせ  
いたどりしがみ子ももどり來し晝餉かな  
切海苔を風のちらせし朝餉かな  
汗ばむを風かろき旅や花豌豆  
瓦小鉢に春の草花づくりかな

西行忌

涅槃會

壬生念佛

野焼

山家集に月さし入りし忌日かな  
片すみに尼のこぼれや西行忌  
ほろくと木の芽かきとる涅槃かな  
壬生念佛伴の野翁のねむりこけ

薄けぶり野焼すぎしか雨しづか  
舟つきの土手焼かれゐる晝の雨  
父と見て野を火の走るこゝろよし



春着  
籬  
白酒  
踏青  
摘草  
鞦韆

友訪へば松の影さす春着かな  
籬まつる里の垣根を訪はれけり  
しろ酒のさめぎはの夜半の薄茶碗  
いつまでも日入らで青を踏みむたり  
つみ草に故人が女子さそひけり  
ぶらごゝのたれてぞとざす別墅かな

夏

梅雨

市陌

梅雨晴一夜まわりどろろう荷ひそめ

夏の月

江につやく水草原や夏の月



鯉種

鯉種のみな爽やかに育ちけり

蜻蛉生る

温室に薄暑の朝日さす頃

蜘蛛の子

扱ひそむる簀網にはやも蜻蛉かな

蚤

蜘蛛の子の走りつきしばし露葉末

紙魚

假すまひ蚤ふるふ夜のつもりける

蟻

紙魚のあとたづね入りたる書林かな

裁つ布を山蟻走る草屋かな

草茂る

草茂るふるさとに舟つきければ

むしばみし小橋に草の茂りけり

餘花

餘花の茶屋うこんの餅る小形にて

桐の花

花桐に一草もなし法の庭

峯入の兜巾ぬぐ家や桐の花

棕櫚の花

閣の尖りて夕映ゆる下の棕櫚の花

天女花

天女花オホヤシロに岩移る鳥の尾長なり

百日紅

さるすべりに夜氣のながるゝ庭に居り



百合

百合の粉の袖にこぼるゝ山路かな

石竹

山泊り庭より入るや百合迎ふ

一八

蒼いやもつ石竹に蒸す日すゞしき日

藻の花

一八や砥屋すゞしげに軒をならべ

蒲の穂

里ふかう藻の咲きみつる寂江かな  
蒲の穂ややんま大王風を翦る

帝木

帝木暮間馬放れしが静まりて

櫻の實

うすき葉裏にさす日の影の櫻の實  
屋のつまに雀子そろへ櫻の實

枇杷

水守がすゞしき枇杷をくれにけり  
庭の枇杷うす日さしゐて客もなし  
枇杷もつや溪がゝりたる百姓家  
枇杷たまへ和子の清書すみにけり



麥秋

麥殻を鵝はふむ小雨ふり出で、

豇豆

麥秋のどよろき耳にせまるなり

瓜

西日さめ垣穂のさゝげつみにけり

紫蘇の花

海原近く帆布干しつらね瓜の宿  
圃の隅にまとめて栽ゑししその花

團扇

團扇買うて二人もつ夜の月ほそく

風鈴

風鈴や秋七草を語る窓

避暑

避暑人に瀧見の手すりむすびけり

晝寐

雨の香の夢をすぎしか晝寐中

天瓜粉

天瓜粉ほの緑子の薄づく夜

曝書

書を曝す隣を訪ふや庭の履

煮梅

旅人に<sup>瘦</sup>度嶺の茶屋の煮梅かな

削氷

坂ゆきつめて櫛の木の下の水茶屋



豆植る

棉蒔

鵜突

豆植うる畔ホトリにけづる小草かな

棉蒔や穂麥のするゝ笠の端

僻村

人少レに猿が鵜突きにけり

夏雑

温室に「ベコニヤ」の老木を愛して

夏蔭の椅子によりて幹さすり馴れ

# 秋

夜寒

客は風呂に居るに夜具敷く夜寒かな  
竿ともに干ぬ衣入れて夜寒かな  
軒の柚に灯を見せてもぐ夜寒かな  
露夜寒法事の客の皆たゝれ  
嫁ぎゆく針子よ里の夜寒川

草庵

妻さわく葉蘭いけしが夜寒かな



冷やか  
魚冷やかに清流の石竅遂し

うそ寒  
小亭

うそ寒う棕のそまるや頸の上

すさまじく石やふるべき夜頃かな

秋の晝  
阪北十三橋畔の餅屋にて

秋の午よきほどに客の出はいりて

秋ふかき夜をこめて磨る粉屋かな

露路の露路にも夜風吹きまわり秋行くや

蕎麥供ふ狸の祠や暮の秋

暮秋  
秋深し

野分  
野分垣起しゐる人に山下りて

秋あらし  
秋あらし箕の小豆ちる門の内

秋の雨  
南天の葉べり紅さすに秋の雨

秋微雨  
秋微雨篠竹すこし伐りもどり

杉垣すかし明るきをまた秋微雨



秋の霜

内風呂に柚を薫らす秋の霜  
新坂の若木ざくらや秋の霜

初沙

初沙のひゃき來つ磴の一二級  
秋出水水草の穂もおもきころ

秋出水

鶺鴒

庭たゝき柚の蔭をゆく水ありて  
干しものに柳ちることよ庭たゝき

啄木鳥

松風幽に黄蘗山のてらつゝき  
破屋一夜柿降りて朝の鶺鴒の聲

鶺鴒

川浪に木の葉ふりやます鶺鴒の聲

鶺鴒

鶺鴒きく旅の子よみじか羽折着て  
燕去ぬるを送り門草むしりつゝ

燕歸る



秋刀魚

秋刀魚荷の一番がつく残月に

鱒

海面に日のまばゆさよ鱒引

蜻蛉

真砂山影明らかに蜻蛉かな

蟲

山ふかき水のたへにとんぼかな  
大いなる水のたまりや蟲の原

草の花

草の花夕日の坂にしばしつむ

朝顔

朝がほまのあたり明けきらでたつ旅垣に

萩

手すものゝ日南くさゝよ庭の萩

芒

しら萩に母の祈りや夕薬師

桔梗

宿かるや芒のはてに月出でゝ

小亭

船にもたらす桔梗水あげて風に起き



女苑

青々翁二三子と來亭作句中假

睡覺めて「秋風見ると人出し間

あるにうたゝれす」の句あり

師はうたゝねす床暮合や女苑ヒメシナン

吾亦紅

吾亦紅かゝる小草も秋に染みて

龍膽

風にいたむ龍膽多し小笹原

菊

高嶺より暮れて光るや菊の花

川舟に酒つむ裏や菊の花

刀豆の花

ある人に

白刀豆の花月によし君は知らじな

木屋

木屋や夜深く占むる詩會の座

散柳

驢馬一つたよりに住めり柳ちる

ちり柳寒石積にやどはるゝ